

第8回脱炭素ワーキンググループ

議事録

日時：2018年1月25日（木） 16:00~18:00

場所：虎ノ門ヒルズ9階 RIO 会議室

出席者：藤野座長、小西委員、白井委員、
小林オブザーバー、飯野オブザーバー

※本議事録では、ワーキンググループを「WG」と記しています。

- 事務局：皆さま、本日はご多用の中お集まりいただき、誠にありがとうございます。定刻になりましたので、第8回脱炭素WGを開催いたします。本WGはメディアの皆様にも公開とさせていただきます。カメラ・スチールの皆様は冒頭撮影のみとさせていただきますが、ペン記者の皆様は会議傍聴可能とさせていただいておりますのでよろしくお願いいたします。本日は藤野座長をはじめ総勢4名の委員及びオブザーバーにご出席いただいております。12月8日に脱炭素ワーキングを開催し、12月15日にDGを開催して、その中でカーボンフットプリントを公開してほしいとのことで1月中に公開するという約束でしたが、無事本日ご報告出来ることになっています。それでは藤野座長からご挨拶をお願いいたします。
- 藤野座長：ありがとうございます。いよいよ数字を交えて具体的な検討を進めていきたいと思います。計画第二版も第一回のパブコメが終わって、具体的な中身を増やしていかないといけないというところですので、活発な議論をよろしくお願いいたします。
- 事務局：ありがとうございます。プレスの皆様の冒頭の撮影はここまでとなりますのでよろしくお願いいたします。以降の議事進行については藤野座長をお願いいたします。
- 藤野座長：今日は議題が5つ用意されていますので、適宜、事務局から説明いただきながら進めていければと思います。まずは前回の議事の振り返りと今後の進め方を事務局から説明をお願いします。
- 事務局：前回の振り返りと今後の進め方について説明
- 藤野座長：いよいよ忙しくなりそうですが、今説明いただいた資料で何かご意見や質問

があればよろしく申し上げます。今までやっていただいたことをきれいに整理していただいたと思います。

特段ないようであれば、後で戻っていただいてもよろしいと思います。次に議題2の東京大会のカーボンフットプリントについて事務局より説明をお願いします。

- 事務局：参考資料1・2を使って東京大会のカーボンフットプリントについて説明
- 藤野座長：ご意見、ご質問等があれば、よろしく申し上げます。
- 小西委員：これまでカーボンフットプリントが出なくて、数字がないまま議論が進んでいくことに対して委員の方からフラストレーションを言わせていただいたのが、形になって出てきたことに敬意を表したいと思います。東京大会はロンドンと比べて新たな輸送インフラが必要ない成熟している都市であるということによって最初からBAUのカーボンフットプリントが小さいということが今後のオリンピックの一つの指針になると思います。今回のデインジョンツリーは組織委員会だけのものではなく、国・都による排出も対象になるということが脱炭素WGの明確な点で、他のWGもこれが当たり前になってほしいと強く願っています。これが脱炭素から上に上がっていくことはいいことだと思います。例えば調達は、組織委員会以外の物をお願いベースなので波及しないという問題がありますが、脱炭素はこれが明確に出ているのがいいことだと思っています。これでようやくスタートラインに立てたと思いますので、会場見直しによる削減量をふまえた293万tからどれだけ削減出来ていくのかという本当の議論にこれから入っていきなと思っています。同時に owned、shared、associated に分けた場合にどのような数字になるのか今の段階で分かっているようでしたら今回の運営計画第二版には入らないのでしょうか。それを確認させていただければと思います。293万tと出てきたことを考えると相当数のオフセットが必要だということがはっきりとてきますので、オフセットがどれだけしっかりしたものになるかということが非常に重要になってくると思います。もう一つの質問がオフセットに対してもガイドラインみたいなものが計画第二版に書き込まれていくのかということもお聞きしたいと思います。どれくらいしっかりしたオフセットが出来得るかということもオリンピックの脱炭素の目標に影響してくると思いますので。今回の段階で上のディスカッショングループで road to zero などのゴールも決まることになると思うんですが、それと絡んでオフセットというものの取り扱いもしっかりしていく必要があるので指針があることが重要だと思います。あとは7ページのエネルギー消費でロンドン大会では算定に含めていない項目の重油・熱・水とあるんですが、ロンドンでは含めていなかったものを東京オリンピックが含めているという一つの積極性を見せるものだと思いますが、この部分の排出量はどれくらいなのでしょう。熱は意外とエネルギーが必要だと思

いますので。重油はボイラーなどを想定していますかね。ここを聞かせていただければというのと、これを増やすことによってロンドンよりどれくらい増えるのかという概算があれば教えてください。

- 事務局：まず owned、shared、associated それぞれの数字がいくつになるかということなのですが、区分に沿って修正していけば出るのですが、今日の段階では、そちらの集計まではやっておりません。オフセットのガイドラインにつきましては、WG の中でも意見をいただいているところで、どういうふうにとどういったものを充てていくかということは検討の課題と捉えています。どれくらい書き込めるかというところは先生方と議論しながらレベル感を相談させていただければと思います。
- 小西委員：ガイドラインを作るということまでは、今回の運営計画に入るという理解で良いですか。あと owned、shared、associated に分けた数値を計画第二版に入るようなタイムラインで考えているかということをお聞きしたいと思います。
- 事務局：ガイドラインについては、今の段階では、案を示せておりませんが、何らかの方向性は出していきたいと考えています。
- 藤野座長：あとは重油や熱、水のボリューム感についてはいかがでしょうか。
- 事務局：重油等につきましては、ボイラーというよりは発電等で使っていく可能性があると考えています。まずはバックアップ電源といった所で使っていくということになると考えています。運営のメインの CO2 排出というよりはそういったところでの活用になると思います。そういったところも踏まえて、電気等に比べて大きくない数値になると考えています。
- 藤野座長：owned、shared、associated の分けについては、参考資料 2 を見ていけば大雑把なところは見えてくるということで良いですかね。そもそも owned、shared、associated 自体もロンドンが土台を作って、それを踏まえることになると思うのですが、関連する組織という項目で組織委員会と記載されているところが基本的に owned になり、一番下の観客のところは associated になる可能性が高いのだと思います。建設の方を見ると東京都や国が入ってきて、ここは Shared になっていくのだと思います。非常におおまかにいうと東京都の分担が約 100 万 t 弱くらいで国が 30 万 t 強くらいになると思います。組織委員会のほうが仮設等で 30 万 t くらいあって、運営が 50 万 t くらいで観客が 80 万 t くらいあると思います。排出責任がどこの部門の活動になっていくのかが、この表が出来たことによって、ようやく見えてきたと思います。

オフセットのガイドラインは量も見ながら、観客の部分はどうするかということもあると思います。計画第二版を出した後に進捗の報告があると思いますが、方針は今回で大体決めてしまうということなので、オフセットについてもルールをある程度明確にするべきだということころはあと2回のWGで議論したいと考えています。

- 小林オブザーバー：観客の移動については、参考資料に各国の観客移動のCFPと書いてありますが、これは国外からの観客移動のみを見ているのか、それとも国内移動も含んでいるのでしょうか。思いとしては今回の大会の売りの一つとして輸送インフラを新たに作らないということがありましたけど、もう一つ信頼性の高い公共交通を活用した大会ということもあると思いますので、国内移動に関してのCFPはどのように算定しているかお聞きしたいと思います。
- 事務局：資料3の7ページ目の所で開催域までの移動というところが主に海外のお客様が日本に来るところです。開催域内の移動という所は日本国内の移動になっていますので両方入ってきます。
- 藤野座長：ここは活動量が人・kmで移動排出係数が書いてありますが、どこから来るかによって係数も変わってくるし、ヨーロッパから来る人はおおまかにいうとこれだけのCO2が出ますし、南米だと余計かかりますし、アジアからだとな少ないという所をミックスしてこの数値になったと理解すればいいですかね。
- 事務局：ご理解の通りです。
- 藤野座長：国内移動のCFPも含めていて、国内移動については何処の空港から何人来るという想定をしてCFPを計算していると。
- 小林企画官：数値については国内と国外で分けていくことを想定していますか。
- 事務局：数字はまとめて出していきたいと考えています。
- 藤野座長：数字については積み上げで算定しているという理解で良いですか。
- 事務局：はい。
- 藤野座長：参考資料2で観客の移動に関する組織としてTRAとTKTとなっていますが、これはそれぞれ何処のファンクショナルエリアですか。

- 事務局：トランスポートとチケットティングという略称です。
- 藤野座長：チケットティングの方で枚数やどこから人が来るのかも見ながらということですかね。今後、観客の移動を見ると二つのファンクショナルエリアが主に排出量の担当になって、右に削減啓発と書いてあるんですけども、ここの二つのファンクショナルエリアが旗を振って 57.5 万 t の CO2 をどのように減らしていくかという所を一生懸命考え、また我々がそこに対して、こういう風に削減したらいいんじゃないかということをご提案していくという理解で良いですかね。
- 事務局：我々持続可能性部も全体に関わりながら進めていくことになると思います。
- 藤野座長：移動とかは飛行機で来るときによくオフセットの話を、飛行機のキャリアなどもやっているの、さらにそれが一般に活用されることにつなげていくことがレガシーになるという理解でいいですかね。
- 白井委員：先ほど小西委員のお話にあった Owned、Shared、Associated のそれぞれの CFP が出せるのかということとガイドラインを作ることはつながった話かと思えます。Owned、Shared、Associated のオフセットをするにあたって、ガイドラインを作るのかといった趣旨だったかと思えます。ただ、ガイドラインを作る時に、必ずしも Owned、Shared、Associated とリンクさせる必要はないのかなと思えます。ディシジョンツリー上の分類とオフセットの考えがリンクしない場合もあるのではないかと思います。また、オフセットについて考える前に、カーボンマネジメントを考えるにあたって、回避、削減、そしてオフセットという順番が大事ではないかと思えます。
- 藤野座長：そこは本当に大事なところで、Owned、Shared、Associated でも責任がよりはっきりしているものをオフセットするのであれば、検証可能性が高いものを充てていくという考え方があるでしょうし、同じ Owned でも、がんばって計算したが、なかなか難しいというところなどはどうするのかというのは、具体の数字を項目ごとに見て考えていくのではないかと思います。
- 小西委員：どう削減していくかが一番重要なところだと思っております。これから運営で、会場見直しによる排出量からさらに削減していけるのかというところや、例えば小宮山委員長がおっしゃっているような再エネをどれだけ増やせるか、それに福島の新エネを充てていくという考え方などは一つのレガシーだと思いますので、再エネだけで話し合う必要があると考えています。もちろん省エネもどれくらいできるかという

数字をこれから積み上げていくのだと思います。それこそが一番のメインなので、やる必要があると思います。なぜ、私がオフセットのガイドラインが作られるかを気にするかというと、Owned、Shared のコアな部分に関しては、なるべく再エネを充てていければと考えているからです。再エネで本当に削減できる分と、日本全体に波及させて再エネを普及するための、色々な再エネのクレジットとか、グリーン電力証書とか、そのような考え方になると思います。もう一つは Associated の観客の移動のところは、排出量の算定自体もおおまかなものになりますし、日本は極東にある国なので、ロンドンなどに比べると、どうしても観客移動からの排出は大きくならざるを得ないということもあると思います。世界に冠たる都市インフラによる国内での移動というのは残念ながら、外から来るのに比べると逆に小さいといった特徴もあると思いますので、ここが恐らく国民参加による色々な排出オフセットなどを考える余地になると思います。余地になると思うからこそ、Owned、Shared には厳格な再エネなどが必要ですよという考え方だけでも今回の運営のガイドラインのところで明確に示されることによって、次の話し合いが進んでいくと思いますので、それが運営計画第二版に入って欲しいと思います。

- 藤野座長：第二版を出すまでには議論しなければいけないことだと思います。今後あと2回のWGで深めていくことになるとは思いますが、例えば、建設の話だと、既存会場や公共交通網を最大限活用する戦略的な会場計画とか、会場建設における環境性能の確保、恒久会場における再生可能エネルギー設備の導入、省エネルギー技術を積極的に導入した会場の建築などがあって、段階に応じては設計が決まっている中で、今の段階でできることもあれば、今後、さらに深掘りしてできることもあると思います。具体的には省エネ設備を入れるのであれば、どのような省エネがさらに可能なのか、再エネをどこから調達するか、会場自体で調達できるのか、外から調達する必要があるのならば、どのように調達するかのルールを検討する必要があるということです。それぞれ関連する組織があるので、持続可能性部が協調しながら、優先順位で言うと、まずは回避ですけれども省エネ・再エネをやっていくということですね。運営の方もずっとこういう風を書いてあって、今は大きな項目としての削減対策が入っていますが、例えばオーバーレイだと物品の最大限の循環型利用によるCO2排出抑制とか、環境性能の高い物品の最大限の調達、確かロンドンでもオーバーレイのテントを学校の施設に持って行って活用したと思います。これは資源循環ともかなり絡んでくる議論になると思いますが、再利用できれば、直接出るCO2量が減っていくと考えられることもあると思うので、ここでどれだけ減らせるかというのがあって、ITサービスでもそういった可能性があります。一回使ったものを他のところでもう一回使うという意味合いですかね。多分、組織委員会の各FAはいきなり数字を見て、自分たちはこんな責任があるんだと分かった上で、より具体的にこうすれば出来ますよといったように、どのよう

にコミュニケーションをしながら具体的なアクションに落とし込んでいくかというのが、これからの勝負かなど。意外とメダルは大会における持続可能性の取組としてはインパクトがありますが、排出量で言うとあまりインパクトがないですね。

- 白井委員：建設のところで、座長からもコメントをいただきましたが、建設本体のところで、設計に何かを反映するというのは、タイミングとしては、なかなか厳しいということはお理解いただければと思います。
- 藤野座長：ただ、CASBEEのSランクだったり、それに準じるものなど、今の時点で、最大限入っているものもあるので、それはそれで入れてもいいと思います。最終的には温暖化の対策をしなかったケースに対しては、CASBEEのSという、品質がよいものを行っているということは、しっかり計算の中に入れていければと思います。カーボンフットプリントも2018年1月現在の算定となっているので、今の時点で計算できるのはこういうことだと思いますが、今の時点の計算と削減の対策がより具体に入った数字も出てくるでしょうし、また、一方でBAUと呼んでいるものも、原単位の精度が上がってくると、この数字は変わってくるという、そういう理解でよろしいですかね。
- 飯野オブザーバー：小西委員がおっしゃるように、しっかり取り組むことが大事ななと思います。お手伝いできる範囲でやらせていただきます。
- 事務局：昨日、小宮山委員長に今回のカーボンフットプリントの件をご説明して参りました。小宮山先生としては、カーボンフットプリントの計算よりも、小宮山先生がおっしゃっているようなモデルプロジェクトをしっかりとやって欲しいというようなご意見でした。
- 藤野座長：次は3番目の議題でカーボンマネジメントですかね。説明をお願いします。
- 事務局：資料3を使ってカーボンマネジメントを説明
- 藤野座長：今の説明に対して、ご質問やご意見はいかがですか。私から、ロンドン大会以降、カーボンの排出量が数値として出されてきているのかなと思いますが、確かりオ大会の場合は、途中まで計算したんですけども、大会後に事務局が解散してしまっただけで数値の確定まで至らずに終わってしまったと理解していいですか。およそPDCAというか、このようなカーボンマネジメントもほとんど回らずに終わってしまったと言ったらリオ関係者に怒られてしまうかもしれません。

- 事務局：ISO はしっかりやっていたので、そこは回っていたと思いますが、最後のレポートを出していないというところです。
- 藤野座長：カーボンマネジメント的なものはここまでしっかりやっていたのでしょうか。
- 事務局：どこまでやっていたかは調べていないですが、ISO20121 を取得しているので、しっかりとマネジメントは進められていたと思っています。
- 藤野座長：ISO20121 のマネジメントは回していたと。確か ISO20121 は大きな意味での PDCA についてはチェックしたと思います。ただ、今回はそれぞれの項目ごとに脱炭素に向けた取組があって、その進捗がうまくいっているかどうかというところを確認しようとしています。自分の理解では、ISO20121 でそこまでの精度を求められて、それをロンドンなり、リオがちゃんとやったかどうかということについては、やっていなかったのではないかと思います。
- 事務局：どうやって、きちんとモニタリングする仕組みを作ったかということがあって、ISO は作った仕組みに対して、しっかりと回していったかということなので、どうモニタリングしているかということは、我々の方で調べられていないです。
- 藤野座長：その辺りは、日本の大会らしいといたら言いますか、ちゃんと担当の方も見えてきて、それぞれのところでしっかりやった成果をモニタリングするという仕組みまで出来れば、それは一つの成果だと思います。その点は場合によったら、IOC で Sustainability をやっている方にもアドバイスをいただきながら、過去の大会との比較も見ながらですね。メダルや再エネほど派手には見えないかもしれないですけども、こういった仕組み自体が、次のパリだったりとかロスだったりとかにしっかりとつながっていくということで、個人的には意味があるのではないかなと思います。つまり、パリ協定自体も仕組み自体がモニタリングして、レビューしていくというプロセスで、そこを具体的にオリンピック・パラリンピックという舞台でパリ協定が謳っていることを実際に実行しましたということになるのかなと。まさに 2020 年からパリ協定がスタートするので、そういう意味では一番大きなスポーツイベントで、それをやりましたというのは、一つのアイコンになるのかなと思います。
- 事務局：後から報告しろと言われてもなかなかできませんので、今、しっかりとモニタリングする仕組みを作らなければいけないと思っています。

- 小西委員：今、藤野座長もおっしゃっていましたが、終わった後のマネジメントの時に、組織委員会は体制的にどうなるのかなど。オリンピックが終わったら解散するとおっしゃっている気がして、どこが責任を持って最後を見るのかなと思います。京都議定書もそうですけど、2年後にきっちり見なきゃいけないところがあったりするので、終わった後も少なくとも2年くらいは母体として必要な気がしますが、体制はいかがでしょうか。
- 事務局：明確ではないですが、2年後までは組織はないのかなと思われま。ただ、せっかくできたシステムを継続していくということは、これから東京都とも協議をしながら、どこかでレガシーとして残していくというのは大きなところだと思います。大きな課題ですので、検討させていただきます。
- 藤野座長：2年後といわずとも2020年末には、大会がどうであったかという報告はされますので、そこまでの面倒は見られるということですかね。
- 事務局：そこまでは、確実に組織がございます。
- 藤野座長：実際、この活動が、今後、それぞれのFAで発生し始めるわけですが、それに応じて、ここで立てたプロセスが本当に機能するかどうかを試して、それでまたちょっとずつ改定していくと思いますが、是非、一つのシステムとしていただけたらと思います。次の議題について、4番目の気候変動分野の大目標及び全体的方向性について事務局から説明をお願いします。
- 事務局：資料3を使って気候変動分野の大目標及び全体的方向性について説明
- 藤野座長：大きな大目標のタイトルと全体の質問も含めていかがでしょうか。
- 小西委員：パブリックコメントで寄せられた Post Zero Carbon あるいは Beyond Zero Carbon というのは、少し行きすぎかなという気がします。やはりゼロにすることをまず第一にもっていくべきであって、ゼロからさらにマイナスにすることを東京大会で言及するのはいかがかなと思うので。前にも一回申し上げましたが、問題がまだはっきりしていないジオエンジニアリングを感じさせてしまうので、Post や Beyond というのはどうかなという気がいたします。ただ、これは脱炭素WGではなく、この上のDGで決めるのでしょうか。脱炭素から提言を出すという感じでしょうか。
- 事務局：WGからのご提案という形で、あとはDGでお決めいただくという形になり

ます。

- 小西委員：そうすると、脱炭素 WG からは、Post とか Beyond は外した方がよいと思います。あと全体的な方向性は、資源管理などと合わせて、具体化した方がよいかなと思います。例えば、パリ協定がスタートする 2020 年に開催される東京大会において、脱炭素社会に向けた戦略を示して、その時にさっきおっしゃっていたような炭素の回避、削減戦略を示し、脱炭素化の礎を築くとか、より明確な言葉にしてもよいのかなと。パリ協定は所与のものとして DG は進んでいると思いますので、そうすればよいかなと思います。
- 白井委員：大目標のイメージとしてはパリ協定が始まる 2020 年は、閉まっている扉を開けて、ようやく一步が始まるというイメージがあるのですが、Beyond だと次の扉まで見えてしまう感じがして、かなり強いトーンなのかなと思います。先まで行くというよりも、まずはパリ協定の概念を目指していくということだと思いますので、Towards Zero Carbon や Step to Zero Carbon の方がその概念には近いのかなと思いました。
- 藤野座長：その点も含めて確か、前回の時に案 3 のように Towards が最初の扉で、その次の扉の Beyond を重ねて書いたというものもあり、賛同もありますが、若干長いかもしれないので、その辺りをどうしようかなと。そういう意味では Post も Beyond も二つ三つ、進んでしまっているのかなと。元々は Towards Zero Carbon のような感じで、そのイメージについては、委員の意見は概ね合っていたと思います。あとは、他の WG での表現と合わせる必要があるのかなと。Zeroing は少し難しいため、パブコメにはあまりコメントは出なかったのかもしれないですが。全体的な方向性について、文量をどうするかというのがありますが、今日の議論も受けて、小西委員もおっしゃったように成熟した都市において、既存施設を有効活用しているということがまず一つの特徴だと思います。それを前提として、さらに省エネ・再エネを進展させていく、その仕組みを作って次につなげていく、そういったことを組み込めると、我々が検討していることを表現できると思いました。文量の関係もあるので、どう入れ込むかはありますが、このところは、案を揉んでいただければと思います。予定だと、3 月の DG の時には案も絞った上で議論してもらって、大きな目標を決め、方向性も原案を示すと思いますが、そんな段取りでよろしいでしょうか。資料自体はこれで終了ですが、スケジュールを見ますと、時間が限られる中で、WG での論点、予定としては、さらなる議論が必要な事項や計画内容詳細とありますが、第 9、10 回で議論しておかなければいけないことなどについて、何かコメントなりご意見があればお願いします。

- 小西委員：一度、再エネに関する議論を WG でやっていただきたいと思っております。小宮山委員長もモデルケースをいかに作るかだとおっしゃっていますが、具体的には、都が計画されている福島の新エネや、再エネで作った水素で FCV を走らせることも含めて、ご説明をいただきながらどういった取組が可能なのかという議論をできればと思っております。例えば、モデルケースとして、今、非常に高い再エネ電力で水素を作るというのは、ものすごく高い水素になるので、現実の社会では、東京オリンピックのためのきれいな例になって、その後に根付かないのではないかとのご意見もあろうかとは思いますが、余剰電力の抑制がこれから始まっていきますので、再エネによる余剰電力をいかに活用できるかということは、今後の社会への一つの大きなレガシーになっていくと思っておりますので、東京オリンピックのレガシーとして残ればいいと思っております。また、経産省で議論が進んでいる非化石電源、非化石証書などもかなり使っていくことになると思っております。東京オリンピックがここまで再エネで全部進めるということを示すと、シグナルとして 2020 年に向けて日本全体に再エネを作ろうという大きな一つの目安になっていきますので、東京オリンピックが日本の社会をインセンティブ化するものとして、大きな形になって、それこそがレガシーとなって残っていくと思っておりますので、是非、経産省からの非化石証書などの話も含めて再エネについて議論する場を一度設けていただきたいと思っております。これは、今回の運営計画には入らないかもしれませんが、次の布石として、6 月までの間に一度お願いできればなと思っております。もう一つは省エネでどこまで削減できるのかというポテンシャル、他の建築などのところでも、別途走っている FA があると聞いておりますので、そうしたところで、どれくらい省エネの可能性があるのかについて、是非ヒアリングさせていただきながら、ようやくスタートラインに立った省エネで何十万トンくらい東京オリンピックは減らせるかという話し合いができる機会もあれば嬉しいと思っております。あとは、脱炭素はこれほど明確に東京オリンピックは都も国も含めたカーボンフットプリントで、それを含めた対策をしていくことが明確に出ている WG ですけれども、資源循環が範囲にしているものはどういうものかという質問と、調達は明確に組織委員会だけというものになっていますので、本当は WG で揃って、外から見た場合、東京オリンピックが組織委員会によるものか、都によるものか、国によるものかという区別はつかず、全部が東京オリンピックになっていくというのが筋だと思うんですけども、WG によるバラつきについて質問させていただければと思います。
- 藤野座長：まず、再エネ・省エネについてお願いします。
- 事務局：WG の中で再エネ・省エネについてどのように議論するか、ご意見をいただきましたので、WG でできるように考えていきたいと思っております。資源につきましては、参考資料 2 にもあるように、物の多くは組織委員会が調達することになるところがカ

ーボンとは違う点でして、組織委員会が調達して組織委員会が排出していくところが資源については主ということがございます。もちろん東京都との関わりはあると思いますが、メインは組織委員会であると捉えております。

- 事務局：主体の観点から言うと、カーボンでも都が建設するところ、国が建設するところがありますが、同じように建設をすれば、廃棄物は出ます。いわゆる建設廃棄物に関しては主体が行ったものはそれぞれの主体が、リユース、リサイクルを行います。そうしたところではフットプリントと相違はないかと思えます。
- 事務局：資源循環についてもご質問いただきましたが、例えば選手村を作りますが、仮設ですので、中を取り壊して、ユニットバスやトイレなど色々なものが出てきますが、それらをどのようにして資源循環できるかについて東京都と協議を進めているところですし、これから具体的にそのあたりも検討をしていきたいと考えております。調達コードにつきましても、今は我々が作ったものを推奨と言いますか、是非同じようにやってくださいということで、関係機関にも協議をしているところです。グリーンバンスメカニズムなど、苦情処理の問題について、都もそういうものを設けなければいけないかなということで、我々が先行してやっておりますけれども、それについての意見交換も始めているところです。これから一緒になって取り組んでいくという状況にございます。
- 藤野座長：6月までに第二版は必ず作りますが、省エネ・再エネの取組は調達も通じながら大会の直前までも含めて、ずっと追求していくべきものであると思えます。そういった時に、このWGをやっている範囲であれば、我々も提言をするという可能性もありますが、カーボンオフセットのルールだけではなく、再エネをどのように確保していくか、省エネについても予算との兼ね合いはあるけれども、どこまでのものを求めていくかというレベル感や、その時の判断基準でどのようなクライテリアを置くかといった考え方のようなものを計画の中に入れていく必要があると思えます。その辺りも含めて、まずは回避策をそれなりに検討したと、次に省エネ・再エネが重要な項目ですので、それをどうやって担保できるかの仕組みですね、それでもどうしても出てしまうものを相殺するという考え方なので、スポンサーとの関係やマーケティングの名前を出せる、出せないという問題なども関わってくると思えますが、一度整理しないとイケないと思えます。福島に限らず、関わりたいという話も聞きますが、どのように紹介したらよいか。私に聞かれても優先的に何かできる訳ではありません。色々な参加の仕方があるというのが今回の東京大会のもう一つの特徴で、小宮山委員長の言葉を借りると自由な参加型社会という言葉になりますが、6月以降参加の可能性をどのように広げていくかということも関心がありますので、是非残りの2回で議論できればと思っております。

ります。

- 事務局：今の件ですと、DG でもお示ししたとおり、人権・参加協働 WG をこれから作っていきまして、その中でも色々検討ができると思っています。スポンサーだけでなく、NGO の方々の参加ということもありますので。また認証プログラムもやっておりますので、そういうことを整理しながら先生方にご提示できればと思っております。
- 藤野座長：こちらの方はもう少し具体的な参加というか、再エネの電力を供給する参加というようなことなので、よりテクニカルというか具体性があるというところで、うまく整理していただければと思います。今日の議題はすべて終了したと思いますので、最後に手島局長からお願いします。
- 事務局：今日は、新年最初の会議でしたが、本当にありがとうございました。ようやくカーボンフットプリントの数字を出すことができました。数字を出すと比較もあるかと思いますが、小西先生にもおっしゃっていただきましたとおり、成熟した都市である東京で開くということで、ベースが違う中で、我々は今回出した数字をいかに削減していくか、自分たちの自己管理と言いますか、大会運営に向けて、無駄をなくして Sustainability に基づく大会にするための一つの物差しをまず作って、それをいかに減らすかということが大きな目標だと思っております。これからはフェーズが変わって、それぞれの FA が具体的に削減に向けて取り組む段階に入ってきていると思います。実施のフェーズということで、FA が具体的にどのような工夫ができるのか、一生懸命やっていければと思っておりますが、先生方にも対策の目標や具体的な取組について、色々ご意見やアドバイスを頂戴できればと思っておりますので、今後ともよろしく願いいたします。

以上